

序

われわれの考古学研究室研究紀要も、前号に引き続き、ここに第6号を刊行する運びとなった。

本号もまた研究室諸氏の日ごろの努力の結晶と言うべきものであるが、創刊以来6年、絶えることなく今日に至ったのは、単に論文が毎年集まったということではなく、研究室一同にそれをまとめるだけの和があったからである。その和とは人の和はもちろん研究の和でもある。それは、各自の研究テーマは多様であっても、衆知を集めて研鑽に励むという姿勢によって支えられているものであり、それによってこそ、これまでの6号の刊行が可能であったと考えられる。ことに一方で構内遺跡の発掘調査が行われ、多忙であるにもかかわらず、学術水準に影響を与えることなく、毎号に研究成果をまとめることが出来たのは、ひとえに一同の熱意と協力によるものと心から感謝したい。

しかしながら外に目を向ければ、今日の考古学界が多くの問題を抱えていることはいうまでもない。そこで、将来起こり得る問題の一つを指摘しておきたい。

それは考古学に今日の活況をもたらした要因の一つである隣接科学との関係である。このような学際的研究が考古学に与えた寄与はいくら評価してもし過ぎることはないが、現在の状況をよく見てみると、考古学者はその成果のつまみ食いに終始しているのではないかと思われることが多々ある。つまりその成果を考古学の中に取り込んで消化し、理論化することなく、ただ考古学の中に集積させていっているのではないかということである。要するに知識のモザイク的な集合にすぎなくなっているのではないか。このような状況が続いていけば、学際的研究は外見的には活発になるであろうが、やがては考古学の中心部に空洞化が起きるのではないだろうか。したがってわれわれは、これから学際的な成果を求心的に考古学の中に引き入れ、十分消化し、考古学のものとする必要がある。それには接触する諸科学の個々の知識のつまみ食いではなく、その学史をも学び、その考えが科学史・科学論の中でどう位置づけられているかということも知っておかねばならない。そうすることによって、考古学の中心部を熟成させていく理論、少なくとも中位理論を作りあげていくことができるであろう。本研究室の活動が、個々の研究に加えてこの面でも学界に寄与することができることを望んでやまない。

なお最後になったが、本紀要の英文要約の校訂に当たってR・ズグスタ氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった安齋正人助手の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上野佳也